

新潟水俣病公式確認61年
新潟水俣病の歴史と教訓を伝えるつどい

水俣病との出会い

~私たちに投げかけてくる問いをめぐって~

新潟県立大学 学生発表

国際地域学部 4年 長谷川 理子

会場：新潟県立環境と人間のふれあい館

開催日：令和8年5月31日(日)

はじめに—発表タイトル「水俣病との出会い」について

今回の発表内容は、

これまでの学習の過程一つひとつを「私」と「水俣病」との**出会いの体験**

として捉え、発表者個人の中で起きた経験を事象のように描いたものとなっています

〈**内容の核**であり、**テーマを形づくったもの**〉

- 『証言 水俣病』 『苦海浄土』
- 水俣でのフィールドワーク、ハンセン病療養所の訪問（昨年の9月に実施）
- 支援者の方の講話

発表の概要・目次

◎私が体験した水俣病との出会いを、4つのエピソードにふれてお話していく形になります

エピソード 1:
谷由布さんのお話

“「未生」の世界が、
みえた”

エピソード 2:
ハンセン病の
お母さんの詩

“母-子のつながり”
“生まれてくるとはど
のようなことか”

エピソード 3:
命の不思議
歌手・青葉市子
さんの言葉

“私の身体はどこから
来ていて
どこへつながっている
のか”

”エピソード 4:
『苦海浄土』より
「草の親」
胎児性水俣病患者の
魂はどこに

“聞こえない声を聴く”
“身体と五感”

1. 「未生」という言葉を知る

谷由布さんのお話を聞いて

- 谷さんは水俣市の近くの町で生まれ、御両親が支援者で幼い頃から患者さんとおつきあってきた方。今は介護などのお仕事をなさっている
- 胎児性水俣病患者の坂本しのぶさんから谷さんが聞いた話しの紹介：

～しのぶさんが87年にベトナムを訪問したときのこと～

ベトナム戦争で人間がまいた枯葉剤によって殺された赤ちゃんたちが、ホルマリン漬けにされて置かれ、それが沢山並んでいる部屋を訪れたしのぶさんの様子を写真を見せながら話してくれました

* この授業のすぐあと、谷さんも同行して坂本しのぶさんはベトナムを38年ぶりに再訪

(つづき) 「未生」という言葉を知る

その写真を見せてもらったとき、

咄嗟に、“不気味”、“怖い”と感じてしまった

なぜなら、戦争などで犠牲になった人は、葬られたり、自然に還ったりしてこの世においてはその形が消えていくものなのに、

赤ちゃんたちはああやって瓶の中で形を維持させられながら、まだそのままこの世に居続けている...

(つづき) 「未生」という言葉を知る

この世に一度は生まれてきた赤ちゃんたちが、あのような姿に
されて封じ込められている

その中で一人ひとりの物語がそこで停止したままになっている状態
見ていてあまりにも息苦しくなるような空間図

考えているうちに無数の、これまで見えていなかった人たちの像が、
存在が、続々と浮かび上がってきた

その存在とは、生まれてくるはずだった命、
つまり「**未生**」の存在 のこと

→私はここからはじめてそのことばを**認識**、**実感**した

つづき

そうした**数々の影の歴史**が、今を生きている私たちの、
こちらの方に目を向けているようにさえ感じられた

彼ら（未生の存在）が見ているこちら側に、何かを訴えているように
思えてならない

私が最初に感じた**不気味さ・怖さ**といった**一次的な感情**が、
次第に**自分自身のなかで問い**へと**変わっていった** ←重要な〔経験〕

あの光景に対して感じた**おぞましさ**とは、じつは**私の**
生きている社会が**抱え続けている**ものではないか

問い—「未生」を思うこととは？

いま生きている「私」が、彼ら（未生の存在）に想いを馳せるということは、どんな意味を持つ行為なのか？

祈りのような、探し求める行為のような、しかし一方ではどこか許しを求めているような…

と現時点ではそうした感じ



ここからは、水俣病学習の過程/フィールドワークの中で、同じく未生の存在について考えさせられ、自分の中で、点と点がつながったかもしれないものをいくつか挙げていきます。

つぎへ→→

2. 母と子のつながり

—生まれてくるとはどのようなことだろうか

菊池恵楓園

二〇二〇年

十二

入所

眠りつづけた

あつたけれど
しかにか
たしは

とも

歩きたかった

あなたとふ

しかにか
たしは
らで結ばれてい

やどつたと

* 熊本県合志市にあるハンセン病療養所 菊池恵楓園(けいふうえん)で見つけた、ある母親の詩

ハンセン病患者のお母さんが、産むことができなかったわが子に対して
思いをつづったと考えられる内容の詩

あなたへ

あなたのいのちが やどったとき
わたしは泣いた

あのとき たしかに

あなたと わたしは

ひとつのいのちで結ばれていた

できることなら あなたとふたり

朝の光のなかを

青空のもとを

夕焼けのなかを

手をつなぎ 歩きたかった

ひとときではあったけれど

あのとき たしかに

あなたと わたしは ともにいた

この涙を

光を見ずに 眠りつづける

あなたに捧ぐ

二〇二〇年 十一月建立

菊池恵楓園 入所者自治会

2. 母と子のつながり

—この世に生まれてくるとはどのようなことか

お母さんの詩の一部を引用

“この涙を **光を見ずに** 眠りつつづける あなたに捧ぐ”

〈考察〉

- お母さんの、たしかにおなかの中に宿っていた未生のわが子の存在と、自分とのつながりを残そうという強い想いを感じ取ることができる
- 「光を見ずに」の**“光”**は何の光か、**太陽**のことだろうか？

3. いのちの不思議：私の身体が持つつながりについて —青葉市子の曲「Dawn in the Adan」より

青葉市子の♪アルバム「Windswept Adan」(2020)に関するインタビュー記事を参照

- 歌手である青葉さんがアルバムに収録された‘Dawn in the Adan’という自身の曲にある歌詞について語ったエピソードから

“一番理解してもらいたい母親という存在。でももう臍の緒は繋がっていない。海の記憶をたどることではか母と接続できないけれど、かつて母だったこの身体には、新たな生命が宿る可能性がある。前の身体を懐かしむ気持ちと、これからやってくるかもしれないもうひとつの命との間に立っていることは、波打ち際にいるときと近い感覚があります。”

* ‘Dawn in the Adan’ (作詞: 青葉市子、作・編曲: 梅林太郎)の解説より

(つづき) ー命の不思議について

- 自分自身の身体が新しい命を宿せる体であることを思い出し、
すごく不思議な感覚、気分になった ちょっと怖い？
- この命の不思議 と、先ほど読んだ**ハンセン病のお母さんの詩**が
強く**リンク**しているように感じる

自分という命、存在はつながりが前提となっている存在
であることに気付いた

わたしたちの命の根源はどこにある？

生まれてこなかった命と生まれた命の違いは？

4. 『苦海浄土』 から考える 一胎児性/小児性水俣病患者の魂はどこに

授業で石牟礼道子さんの『苦海浄土』を読み、忘れられないエピソードが、

第四章「九竜権現さま」・「海石」、

第五章の「草の親」

今回は、母と子の関係がテーマになりつつあるので、**後者**を取り上げます

「草の親」→小児性患者のゆりちゃんのお母さん

* 「九竜権現様」「海石」・・・胎児性患者の空太郎少年のお爺さん

石牟礼道子(2004)『苦海浄土』第五章「草の親」より

一胎児性/小児性水俣病患者の魂はどこに

【お母さんのゆりちゃんを想った言葉の数々】

「手足こそ鳥の子のようにやせ干こけるが、
顔はだんだん娘らしゅうなってきたよ。」

...

「そんならとうちゃん、ゆりが吐きよる息は何の息じゃるか——。
草の吐きよる息じゃるか。」

...

「魂のなかごつなつた子なれば、ゆりはなんしに、
この世に生まれてきた子じゃいよ。」

(石牟礼 2004, 268-273頁)

(つづき) 「草の親」より

「うちはなあとうちゃん、ゆりはああしてて寝とるばかり、もう死んだる者じゃ。草や木と同じに息しとるばかり、そげんおもう。

ゆりが草木ならば、うちは草木の親じゃ。ゆりがとかげの子ならとかげの親、鳥の子ならば鳥の親、めめずの子ならばめめずの親——」

「なんの親でもよかたいなあ。鳥じゃろと草じゃろと。
うちはゆりの親でさえあれば、なんの親にでもなってよか。」

(石牟礼 2004, 268-273頁)

引用部分の流れをよむ

お母さんはこのとき、もう体が動かなくなり、声も発せられなくなってしまったゆりちゃんの魂が、一体どこにあるのかをずっと探している

最初のほうは鳥やトカゲ、草木を人間未満の存在として捉えていた
そこから、何の親かと自問自答を繰り返すうちに、最後には

お母さんのすぐそこで息をしてたしかに存在している、ゆりちゃんの命の親であることに気づいていき、母子のつながりだけがこの問いの答え（前のスライドの黄色の部分）になっていく

止まらない問い 私の身体はどこからどこまで？どこへとつながっているのか？

私はどこからどこへつながっている？

何を求めているのか？

どこから来ているのか？

動物や植物から来ているのか？

どこへつながっているのか？

歴史の連続性、身体の連続性を感じる経験

近生

キーワード：母－子の関係、自分の身体の内側の

身体の内側の

根源

フィールドワークで訪れた
水俣湾埋立地

この場所について、編者の栗原彬さんは『証言 水俣病』の冒頭で、水俣病の問題に取り組むなかで浮かび上がってくる「見えていない者」、「未生の世界」を次のように考えています。



栗原彬編『証言 水俣病』より
序章「死者と未生の者のほとりから」

“野仏は表土の上に立てられているけれども、実は百間の海の上に立てられている。海に帰った者たちの声が、海のざわめきと共に、野仏を通じて聞こえてくる。(略)

水俣病患者の語りは、野仏の声に似ている。死者と未生の者のほとりに立って語られた言葉だからである。

死者はこのように語りたかったのか。これから生まれてくる子は、こんなことを言いたいのか。”

聴こえてくる声に耳をすます

- 水俣病患者である緒方正人さんは、水俣病事件で亡くなった測り知れない数のいのちのたまたま私たちが

未生の世界、命の世界というのは言語という一手段では表しても表しつくせない世界だと思った

水俣病

れ

救いということだけではなくて、実は生きている私たちにかけられた願いだと思うわけです。(栗原 2000, 199頁)

まとめーここまでをふりかえって

【水俣病に出会った、自分の経験をふりかえり…】

- もし、水俣病に出会っていなければ思いつくこともなかったであろうこと、自分自身が生きることに對しての考えるべき問いをたくさん得ることができた
- 水俣病が、はじめてわたしに「いのち」というものについて正面から向き合わせてくれた

わたしはこれからも、自分に与えられた **いのち**
について考えていこうとおもいます

引用文献

- 石牟礼道子(2004) 『苦海浄土』 講談社文庫, 268-273頁
- 菊池恵楓園入所者自治会(n.d.) 「あなたへ」 厚生労働省
<https://www.mhlw.go.jp/content/10905000/001223001.pdf>
(2025年3月6日アクセス)
- 栗原彬 編(2000) 『証言 水俣病』 岩波新書, 3-4頁, 199頁
- CINRA 「青葉市子『アダンの風』全曲解説。作曲家・梅林太郎と共に語る」
https://www.cinra.net/article/interview-202102-aobaichiko_ymmtscl (2025年11月25日アクセス)



ご清聴ありがとうございました

